

【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します

キャンパス生活を実りあるものに — 学生部

【懸賞論文と文芸作品コンクール鳳賞】

論文●佐野 準さん — 中国の「格差」「環境」問題に迫る

文芸●伊藤 彩さん — 「懐かしい映画のひとコマのよう」

「懸賞論文と文芸作品コンクール」(学生部主催)の2007年度の入賞者が決まり、表彰式が12月3日、生田キャンパスで行われた。入賞者には嶋根克己学生部長から賞金、賞品が贈られた。

最高賞である鳳賞は、「懸賞論文」部門が国際経済学科の佐野準さん、「文芸作品」部門は大学院生の伊藤彩さん。

佐野さんは、現在の中国が持つ深刻な経済格差や環境問題について探求した。2005年に上海、06年に北京を短期留学プログラムで訪れた。高層ビルが建ち並び、著しい経済発展を目の当たりにする一方、町にはポロを身にまとい物乞いをする人が多いことにショックを受けた。



▲入賞者と審査員のみなさん

「今後、中国は量から質への転換が可能か。その最適なシナリオは何かを考えてみました」。

ゼミ指導の室井義雄教授に勧められての応募。「経済学的アプローチで貧困を学んだことがベースになりました」と語っている。

伊藤さんの作品は、9歳になる少女と少年が、家族も仕事も持たない「おいちゃん」と織り成す心の交流を、夏の夜の情景とともに描いた。「懐かしい映画のひとコマを見るようだ」(柘植光彦教授)、「文章力が秀でていて、エピソードの組み立てがうまい」(小林恭二教授)など、審査員一致で決まった。

「以前から児童文学に興味を持っていて、小説の背景は自然と生まれました」。小林教授を指導教授に文学の研究をしている。「書くことを意識すると、読み方が変わってくるから面白い」と語る。

入賞者と作品名

(敬称略)

●懸賞論文

〔鳳賞〕

▽佐野準(経済4)「中国における『持続可能な発展』について—改革・開放政策がもたらした『負の遺産』への対応—」

〔優秀賞〕

▽尾崎弘之(経済4)「共生を目指して～アイヌから学ぶ～」

▽菅裕実子(経営3)「国際社会の動向から読み取る 理想的人間像の変化」

▽古農幸江(経済3)「グラミン銀行～貧困なき世界に向けて～」

〔佳作〕

▽板倉沙織(経済4)「マサイアクセサリーの減少は、スラム人口を増加させる」

▽大久保祐介(経済4)「外国人労働者に対する意識改革」

- ▽小川信一郎(文3)「関東地域に残る高句麗渡来氏族の足跡と現代日本」
- ▽小池裕佳(経済4)「社会的弱者～知的・身体障害者との体験から～」
- ▽中尾香耶(文3)「都市景観から見えるもの—騒色の街のアイデンティティー」

●文芸作品

〔鳳賞〕

- ▽伊藤彩(大学院文修1)「夏の宵」

〔優秀賞〕

- ▽引野勉(文3)「空を砕く」
- ▽長谷川潤(文4)「東三田小雨」
- ▽菅原敦子(文3)「花どろぼう」
- ▽河野有美(二部法3)「あの日に向かって」

〔佳作〕

- ▽吉井知行(文3)「変声期」
- ▽鈴木俊恭(文2)「目玉蟹」
- ▽皆川香織(文3)「ビター イン ミルクコーヒー」

【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します

キャンパス生活を突りあるものに — 学生部

【海外研修・国際交流奨励制度】

海外での調査、ボランティア活動などの体験旅行を希望する学生に奨励金を支給する海外研修・国際交流奨励制度の07年度後期奨励生に戸津亜里紗さん(ネット情報3)ら8学生が決まった。インドネシアを旅行する戸津さんに話を聞いた。

インドネシアの子供たちに車椅子を贈る — 戸津 亜里紗さん(海外研修・国際交流奨励学生)

障がい者も外に出よう

使わなくなった車椅子をインドネシアに贈る運動を続けている戸津亜里紗さん。奨励金を得て3月、ジャカルタの障がい児学校を訪問し、電動車椅子など5台以上を贈る。

戸津さんは脊髄(せきずい)性筋萎縮(いしゆく)症により、全身の筋力が弱く、移動には電動車椅子を使う。「身体が不自由なのを理由に、自分のやりたいことを我慢したくない」と、子供のころから外出をいとわず、小学校からすべて普通学校に通った。民族学を専門とする大学教授の父と伝統的なアジアの布を使う服飾家の母とともに毎年、インドネシアなどアジア諸国を訪れる。



▲友人と食事をする戸津さん(右から2人目)＝生田キャンパスで

数年前、ジャカルタの町で車椅子姿がほとんど見られないことに気づいた。「体が不自由でも、外に出れば世界が広がるのに」。そこで子供の時に使った車椅子やバギーなど6台を、ボランティア団体「空飛ぶ車いす」の協力を得て障がい児学校に贈ったところ、とても喜ばれた。以来、協力の輪が広がり、これまで30台近くの車椅子を贈った。

「今までの旅行は両親の計画に従ってきましたが、今回は自分でスケジュールを立てられるのがうれしい」と語り、現地の子供たちとの交流を楽しみにしている。

「インターネットの世界は、バリアーなしに人々が対等に話し、交流できる」とパソコンを操り、本学への入学は、バリアフリーが整い「障がい者にやさしい大学」であることが決め手に。中村友保プロジェクトでは、仲間たちと専大のブランディングを高める具体例を探った。

絵を描き、小説を書く。「作家志望者サークル」を運営し、仲間と交流。年長者から悩みの相談を受けたこともあるとか。

将来は、大学で学んだ技術を生かして新しい分野に挑戦したい。「ありのままの自分で『人』とかかわり、社会に貢献したい。そのための環境づくりもします」。どんなに苦しくても前向きに進む姿勢を失わない。絶やさぬ笑顔が印象的だ。



他の海外研修・国際交流奨励生と訪問先は以下の通り＝敬称略。

- ▽里吉謙一(経済3・ウガンダ)
- ▽寺田美津帆(商2・カンボジア)
- ▽安田詩織(商2・同)▽綿引勇太(文3・ベトナム)
- ▽橋ゆりえ(文2・フィンランド)▽荒地里美(文2・フランス)

▽稲垣信(文2・中国)

【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します

育英会奨励賞

育英会奨励賞受賞 文学部・川上隆志ゼミ

『SHOW』第2号完成 — 東京の「光と影」に切り込む

五輪招致、被差別部落、学生運動…

文学部・川上隆志ゼミ生による雑誌『SHOW』第2号が刊行された。3年次生14人で作り上げた創刊号に続き、2年次生6人が加わった今号は、まると東京特集。2016年五輪開催地に立候補している国際都市・東京の光と影に、旺盛な探究心で切り込んだ。

川上ゼミのテーマは編集学・出版学。森羅万象、現代社会が抱えるさまざまな現象や問題に、学生自らの視点で取り組み、未来に向け発信していく。『SHOW』はその集大成だ。



▲表紙

▲裏表紙

構成、取材、レイアウト、校正、製作まで雑誌出版におけるすべてをメンバーがこなす。岩波書店の元編集者である川上教授の指導で今回もぶあつい96ページが完成した。

「東京」特集といっても、ありきたりの名所案内ではない。11ページにわたって展開した「その時、走り出した」。ここでは東京五輪招致に潜む大問題を抉(えぐ)り出した。

五輪メディアセンターに予定されるのが築地市場「跡地」。ところが、築地市場の移転地になる豊洲は、高濃度の土壌・地下水汚染に見舞われている。「日本科学者会議・公害環境問題研究委員会」メンバーから実態を聞き、「日本の台所」で働く市場の人々の移転反対への切実な声を載せた。背後にある大手水産による仲卸業者つぶし、さらに五輪後の築地再開発計画にも言及。担当した松本かおりさん(2年次)は「東京をより成熟した都市に」とする五輪理念とかけ離れた実態に「果たして世界は、東京の五輪開催を認めるだろうか」と問いかける。

「知らない東京 浅草、見えない事実を見る」では浅草にいまも残る「被差別部落」を訪ね、その研究者に若林彩香さん(3年次)が取材。異質なものはじき出し、「普通の人間」を求める日本人の内なる差別意識を浮かび上がらせた。

もはや歴史の一コマになった「学生闘争(運動)」。1960年代後半の全共闘運動で東大改革を求め、安田講堂に立てこもった元東大生に、井上佳祐さん(3年次)がインタビュー。「この時代の学生は、大学が抱える問題も当時のベトナム戦争も、『自分のこと』だった」という発言に共鳴している。

東京は世界有数の経済都市でもある。「世界とつながる町工場」は、戦後の経済復興の原動力となった中小企業をクローズアップ。世界で評価される町工場の技術力と「これから」に焦点を当てた。



▲川上教授(左端)を交え編集会議

そのほか、未来の歌舞伎役者や学生街の声なども拾った。東京にまつわる小説4点も。大沼孝太郎さん(3年次)と作家としても活躍する小林恭二教授のゼミ生3人の作品だ。

メンバーは「人に会うことの大切さを知った」(町田侑子さん・3年次)、「話を聞いて表現するのは難しい」(矢嶋仁さん・2年次)などインタビューに苦労したようだが、「2回経験して雑誌作りの面白さが分かってきた」(関根香織さん・3年次)とも。

川上教授は「メンバーがよくまとまった。編集・技術の力が向上し、深層に迫る姿勢は格段に進歩した」と評価している。

編集長を務めた竹内里栄さん(3年次)は、「雑誌作りによっていままで見えなかったものが見えてきた」と語る。

第8回育友会奨励賞受賞。第2号希望者は、生田キャンパス10626研究室へ。問い合わせは、竹内編集長まで。